

「タイムトラベルと江戸とエネルギー問題」

小河俊紀

9月24日付け読売新聞朝刊に「光より早い素粒子観測」と題する記事が一面トップを飾り、名古屋大学が参加する国際研究チームの快挙を報じていた。それから連日「近未来、いよいよタイムトラベル実現か？」という報道が賑やかだ。

確かに、「光より早い素粒子はない」というアインシュタインの相対性理論は今まで絶対だったから、今回の観測結果は目に見える世界（物質）だけを追求してきた近代科学の根底まで揺るがす“歴史的発見”である。宇宙物理学の素人ながら、私なりの解釈について、僭越ながら本稿で少し触れてみたい。

★目に見えない世界の意味

今回の観測内容は、広大な宇宙の仮説として、これまでも唱えた学者がいた。ただし観測装置が未熟なため具体的に証明できず、あくまで異端学説に過ぎなかった。

しかし、宇宙の構造に関し、近年新しい学説が浮上している。たとえば、宇宙の96%は何も見えない暗黒の真空空間でありながら、虚ろなゼロの世界ではなく、大量・多様な素粒子で充満し、我々人間ふくめ宇宙全体に大きな影響を与え続けているという。

そういえば、「目に見えない人の心も、超光速素粒子の波動であり、肉体（物質）に大きな影響を与えている」との説がある。観測装置の発達次第では、生命の真相が21世紀中に解明できるだろうとも言われ、怖いようで、何か説得力がある。

**★空手と謡曲にのめり込んだ学生時代**

タイムトラベルといえば、私はなぜか江戸の風景が大好きで、30〜40代のころ自分が江戸に実際住んでいる夢をよく見た。ヒットした空想ドラマ「JIN-仁」に似ている。どうして昔から江戸が好きかよく分からないが、下地になる過去体験には思い当たる。学生時代、私は空手と謡曲に明け暮れた。

1970年当時、故郷富山の大学も学園紛争が吹き荒れ、構内は断続的に封鎖された。ノンポリの私は、仕方なく右翼的な空手部を避け、街の空手道場に通った。さらに、両親の薦めで大学の文化サークル「謡曲部」(観世流能楽)にも入会した。空手道場と謡曲部の練習部屋を行き来する硬派な青春時代だった。偶然にも、空手と謡曲は、いずれも武士道に通じていた。



★古刹に籠って空手修行

空手は唐手とも書く。文字通り、中国で生まれ、沖縄で進化した。江戸時代、薩摩藩から武器を奪われた島民の自己防衛策として、剣と同様の「一撃必殺」武道となったのだ。空手修行の一環として、私は大伴家持ゆかりの高岡市二上山中の名刹「国泰寺」に2週間籠ったことがある。夜中は周囲が漆黒の闇になり、天井を蛇が徘徊する不気味な庵に独り生活した。

座禅と空手修行と読書三昧だけの、正に江戸時代にタイムスリップしたような毎日だった。この時読んだ本のひとつに「山岡鉄舟」(大森曹玄著)がある。山岡鉄舟は、幕末に勝海舟と共に江戸城の無血開城に貢献し、明治維新以降も新政府要人として活躍した。塚原ト伝の流れを汲む剣豪で「日本最後の侍」と呼ばれる。本物のラストサムライだ。当時荒れ果てていたこの国泰寺修復にも尽力した。数々残した名言の中で「武士道は心を元として形に発動するもの」が印象深い。



### ★延暦寺での謡曲修行

一方、能楽は、室町時代初期に世阿弥が完成し、室町幕府三代将軍足利義満から江戸時代にいたるまで、武士層に長く支持され続けた芸能である。かの織田信長が、「人間五十年」と、事有るごとに謡曲「敦盛」を舞った事でも有名だ。

魂を主題としている古典芸能なので、古い

お寺での合宿練習が多かった。一番強烈な思い出は、江戸初期に再建された比叡山延暦寺根本中堂での修業だった。夜中に、五体投地という全身礼拝を何時間も続けさせられ、大変だった。しかし、時間が止まったような深山の静寂にいと、あたかも江戸初期にタイムスリップしたようだった。後に、延暦寺が世界遺産に登録された意味がよく理解できる。タイムマシンがなくても、文化遺産に恵まれ、疑似タイムトラベルが容易にできる日本をありがたい、と思う。

★エネルギー問題の明日

タイムトラベルは、人類長年の夢だからワクワクするテーマだが、喫緊のテーマは何と言ってもエネルギー問題だ。

今回、光子より早い新素粒子の存在が証明された以上、未開の宇宙エネルギー（素粒子）の解析が一気に進み、安全な抽出技術が確立される日が待ち遠しい。

